塞と大月氏

小谷仲男

はじめに
一　バクトリア王國の滅亡
二　『漢書』の塞種
三　『史記』と『漢書』の相違
四　塞種の傳說性
むすび

はじめに

中國史書のなかで西方の古代民族に言及した部分は、記錄の乏しい時代ゆえ、ひじように貴重視される。そのなかに匈奴と同時代に活躍した民族として大月氏と塞があげられる。大月氏は從來から比較的詳細に研究され、現在ではのちに東西交涉の仲介者となるクシャン人 Kushans（後漢書＝貴霜）の前身であるか、それともクシャン人とは別民族で、クシャンをふくむバクトリア Bactria の土着民つまり大夏の征服者であるかという大きな問題にぶつかっている。[1] 一方、塞のほうは最近あまり議論にのぼらないが、塞（顏師固の塞字の註に先得反とある）の音が西方史書のスキタイあるいはサカ（Scythians, Saka, Sacae）に類似するところから、はやくから塞＝サカ同一說が支配的となった。西方史書のスキタイ、

サカとは、アム河（Amu Daria）やシル河（Syr Daria）の間やその北方にすむ遊牧民族で、紀元前二世紀中にギリシア人王國のバクトリアを滅亡させた民族としてつたえられているものである。

しかし、いま私が『漢書』の塞の記事をバクトリアやガンダーラの歴史とあわせてかんがえてみると、どうしてもふにおちない點があり、さらに『漢書』の塞にまつわる史實を、前代の『史記』とよみくらべてみると、塞にはその實在性をうたがわせるところがある。以下の論考は主として『漢書』にかかれた塞民族についての史料批判である。

一　バクトリア王國の滅亡

バクトリア Bactria はヘレニズム世界のもっとも東方に成立したギリシア人王國である。首都はバクトラ Bactra で、王國の領域は正確にさだめることはむつかしいが、だいたい現在のアフガニスタン北部、アム河（古名、オクサス、Oxus 嬀水）の流域で、「千の都市 thousand cities of Bactria」を領有していたといわれる。[8] バクトリアの名はギリシア王國成立以前から記錄にある。アケメネス王朝の二十の屬州 Satrapy のなかに、東方の地域としてガンダーラ Gandhāra、ソグド Sogdiana とならんでバクトリアの名があげられ、毎年アケメネス朝廷に一定額の納税をおこなっていた。そのごマケドニアのアレキサンダー大王がアケネメス朝の王都ペルセポリスを燒き、さらに東方へ遠征をつづけ、インダス河に達し（B. C. 327）、短命ではあったが諸民族を融合した一大帝國を建設した。大王の死後、この帝國はかれの部將に分割統治され、バクトリアはシリアに本據をすえたセレウコス Seleukos Nikator の領土にはいった。やがてセレウコス王家の支配力がよわまり、南のインド・マウリア王朝が強力となって、東方領土をいちじるしく侵略する。紀元前二五〇年ころになると、現在のイランにパルチア Parthia が獨立して王國をつくり、これと前後してバクトリアにギリシア人太守ディオドトス Diodotus が獨立國をつくった。これがバクトリア王國の創始である。

これまでに多くの學者がギリシア・バクトリアの遺跡をさがしあてようとしたが成功していない。パルチアの領内の古

代都市のニサ Nysa（ソ連領アシュハバード Ashkhabād 附近）からは、大理石のヴィーナス像や象牙のリュトンそのほかのヘレニズム時代の多くの遺物がみつかっているが、バクトラはその宮殿の所在さえ確認できない。たしかに現在のアフガニスタンのバルフ Balkh がその名をつたえたものにちがいなく、町の周圍には城壁が、北郊にはアクロポリスに類するようなバーラ・ヒサール Bāla-Hisār（高い丘のいみ）がのこり、考古學者をさそうが、地下ふかく埋没しているせいかギリシア時代の遺構はなかなかみつからない。[3] ガンダーラ佛教美術の起原をバクトリア系ギリシア美術にもとめるフランス考古學調査隊がとくに關心をいだき、一九三三年以來、再三發掘をこころみたが、豫想される宮殿・神殿、彫刻などはなにひとつみつからない。忘れられた王國 Forgotten Kingdom としていまなおなぞにつつまれている。しかしごく最近になって、フランス調査隊はバルフ（バクトラ）から東方へ約一五〇㎞はなれたアム河の東岸、アイ・ハヌム Ai Khanum という地點（コクチャ Kokcha 川の合流點）で、ギリシア都市らしい遺跡を發見した。一九六四年以來ひきつづき發掘中であるが、バルフとちがって石灰岩製の列柱宮殿址があきらかになりつつある。[4] そのほかギリシア語銘を刻したヘルメスの門柱や美しい土器片など興味ぶかい發見がつたえられる。地理的位置からバクトリアの首都そのものではなさそうであるが、ギリシア・バクトリアの一都市にちがいなく、成果が期待される。

アイ・ハヌム遺跡の發見以前にはたしかにバクトリア・ギリシアの都市は一つも知られなかったが、バクトリア諸王の貨幣がそれまでにバルフやクンドゥズの各地から數多く發見されていた。それが記錄に失なわれていたバクトリア王家の系譜を復元する唯一の手がかりであった。貨幣上の研究（Numismatics）は、古くからはじまっており、[5] ここでは詳しく紹介するゆとりがないが、大まかにいうとディオドトス Diodotus 以下の初期の王の貨幣は銀貨が主で、正規のギリシア重量（Attic weight）をもつ（貨幣としてはテトラ・ドラフム＝18 g）。表面は王の胸像、裏面は神像とギリシア文字銘が打刻される。ギリシア・バクトリア王はやがてヒンドゥクシュ山脈をこえて南へ支配をひろげ、しだいにヒンドゥクシュの南方に王國の重心がうつるようになる。そのなかで顯著な王は Apollodotus や Menander（佛典のミリンダ Milinda

王）である。年代ははっきりしないが、バクトリア王國成立後約一世紀の紀元前一五〇年ころとおもわれる。そのころになると貨幣はしだいに小型になり重量を減じ、ギリシア重量規準をはずれる。さらにギリシア文字銘は表面に記され、裏面には西北インドの土着文字であるカロシュティ文字（Kharoshthi）が出現し、二語併用（Bilingual Coin）の特徴をおびる。貨幣研究の上ではさきの時代、つまり Attic weight を保持する貨幣をギリシア・バクトリア Graeco-Bactrian 貨幣といい、ギリシア・バクトリア王がヒンドゥクシュをこえて南下し、インド化してからの貨幣をインド・バクトリア Indo-Bactrian 貨幣とよびならわしている。[8]

ギリシア・バクトリア王國の重心がヒンドゥクシュの北から南へうつるのと呼應するかのように、ヒンドゥクシュ北方のバクトリア王國は侵入する遊牧民族や土着民の手によって滅亡されてしまったらしい。その時期は正確に知りがたいが、ストラボ Strabo やラテン史家のトログス Trogus らによって、バクトリア王國滅亡のことがはっきりと記錄されている。

On the left and opposite these peoples are situated the Scythian or nomadic tribes, which cover the whole of the northern side. Now the greater part of the Scythians, beginning at the Caspian Sea, are called Däae, but those who are situated more to the east than these are named Massagetae and Sacae, whereas all the rest are given the name of Scythians, though each people is given a separate name of its own. They are all for the most part nomads. But the best known of the nomads are those who took away Bactriana from the Greeks, I mean the Asii, Pasiani, Tochari, and Sacarauli, who originally came from the country on the other side of the Iaxartes River that adjoins that of the Sacae and the Sogdiani and was occupied by the Sacae. (Strabo, xi, 8, 2)

ストラボ地理誌によれば、[7] バクトリアをギリシア人から奪った民族は Asii, Pasiani, Tochari, Sacarauli であるといい、前後の文章から、かれらをふくめた遊牧民がスキタイ人（Scythians）と總稱され、西方の Däae（パルチア人）に對

し、東方のものは Massagetae や Sacae とよばれていたことが知られる。

またトログス Trogus の史書斷片（序）には、[8]

In the affairs of Bactria how king Diodotus established his rule: then how, during his reign, the Scythian tribes Saraucae and Asiani seized Bactra and Sogdiani. (Prologues, xli)

という。トログスの史書は右の題目しかのこされていないが、ストラボと同様、バクトリアの滅亡についてのべたものとされる。

一方、中國史書はギリシア王國時代のバクトリアについてはまだ十分知識をもちあわさなかったようである。ただ、バクトリア王國の滅亡後まもなくのことについては、漢の武帝によって西方に派遣された張騫の報告によってようやく知られはじめたとおもう。前漢の第五代皇帝、武帝の治世になって、國内の統治もようやく強固になったが、漢北には騎馬遊牧民族の匈奴が雄飛し、長城をこえて漢民族を苦しめることがしきりであった。漢北の匈奴に對し、天山地域から河西地方にかけて、イラン系とおもえる大月氏という民族が居住し、遊牧をおこなうかたわら、西域の富やさらに西アジアや地中海の珍物を漢に輸入する仲介の役目をはたしていたとおもえる。匈奴はこの貿易の利をみのがすはずがなく、大月氏をいくども攻撃し、あるときは大月氏王を殺害して、その頭骨をさかづきに酒をのんだといわれている。[9]

當時、武帝をはじめ漢人たちは輸入される珍物をとおし西域に關心をいだきつつあったときであり、また一方で北方の匈奴の侵略に手をやいていたときなので、一策を案じ、怨を懷く大月氏と連盟して匈奴を東西から挾撃せんと企てた。大月氏への使者として勇敢なる人物を一般から募集したが、それにえらばれたのがさきの張騫であった。張騫は長安をでて西方にむかったが、はたして途中、天山のあたりで匈奴につかまり、とらわれの身のまま十年餘り匈奴の妻をめとってくらした。しかし志を忘れず、監視の目のゆるんだすきにのがれて、ふたたび大月氏への旅をつづけた。フェールガーナ（大宛）をとおり、ソグド（康居）をすぎ、ついにアム河流域の大月氏の居據にたどりついた。しかし大月氏はもはや匈

奴に反擊するこころざしがなく、挾擊の企ては實現しなかった。そのとき張騫は大夏（バクトリア）にまで足をのばしており、中國に生還した張騫の報告は、當初の目的がはたされなかったとはいえ、西域のさまざまな様子をつたえことで大きな意義がある。[19] 中國人にとって西域がにわかに現實的なものとなり、そのごの西域經營にはめざましいものがある。

『史記』、『漢書』にはバクトリアあるいはバクトラの名をそのままうつしたものがみあたらない。同地域をもっぱら大夏の名でよんでいるが、これはバクトリアにすむ土着人トハラ（Strabo-Tochar）をいったものであろう。バクトリアはのちには吐火羅（北史、唐書）、覩貨邏（大唐西域記）とかかれたり、イスラム史家にはトハリスタン Tokharistan、つまりトハラ人の土地〉の名でよばれる。大夏の首都は藍市（史記）、監氏（漢書）といい、バクトリアの首都バクトラ Bactra にあたるとおもうが、音韻上の對應はなりたちにくい。

さて、張騫が大夏（バクトリア）を訪れたときには、すでに大月氏がこの國を征服し、ギリシア・バクトリア王國は滅亡したあとであった。

大夏在大宛西南二千餘里嬀水南。其俗土著有城屋。與大宛同俗。無大王長。往往城邑置小長。其兵弱畏戰。善賈市。及大月氏西徙。攻敗之。皆臣畜大夏。大夏民多。可百餘萬。其都曰藍市城。有市販賈諸物。其東南有身毒國。（『史記』卷一二三大宛傳）

桑原隲藏氏は「張騫の遠征」の論文のなかで、張騫の中國出發を紀元前一三九年ころに、大夏到着を紀元前一二九～八年ころに、長安歸國を紀元前一二六年とする。そうすれば大月氏は張騫の大夏到着以前に、大夏すなわちバクトリアをほろぼしてしまったとみることができる。ストラボ Strabo はバクトリアの滅亡時期については明記せず、さきに引用したトログス Trogus の記事では創設者のディオドトス Diodotus の治世にかけているようによめるが、これは解釋しにくい。バクトリアの滅亡時期については、一應ギリシア・バクトリアの主力がヒンドゥクシュの南にうつった紀元前一五〇年ころから張騫の遠征の紀元前一二九年のあいだと推定しておく。

二　『漢書』の塞種

西方の史家はシル河（ヤクサルテス）のかなたからきたスキタイ人 Scythians がギリシア・バクトリアをほろぼしたとし、中國史料では大月氏が大夏をほろぼしたとする。これは歴史上の同一事件をのべているとおもうが、現在の學界ではこの東西兩史料をうまく照合させて理解しているとはいえない。東西史料の一致をむつかしくさせている理由は、『史記』とならんで中國側の重要な史料である『漢書』に〈塞〉というもう一つの民族が登場するからである。この塞はストラボ Strabo などのいうサカ Sacae (Scythians) と音がよく似ていて、バクトリアをほろぼしたサカ Sacae (Scythians) は、中國史料の塞民族であろうという考えが定説のようになっているからである。サカ＝塞がバクトリア王國を滅亡させたのであれば、大月氏がもう一度大夏（バクトリア）を滅亡、征服したことになる。しかし東西兩史料からは、けっしてバクトリア大夏の滅亡が二度にわたっておこなわれたとはよみとれない。從來の研究、學説ではこの點を納得いくように説明しおえたとはいえない。

では中國史料の塞とはどういう民族であるのか。塞族は『漢書』においてはじめてあらわれる。『漢書』卷九十六、西域傳烏孫國條に

烏孫國……本塞地也。大月氏西破走塞王。塞王南越縣度。大月氏居其地。後烏孫昆莫擊破大月氏。大月氏徙西臣大夏。而烏孫昆莫居之。故烏孫民有塞種。大月氏種云。

とある。當時の烏孫は天山北麓、イシックル Issyk-kul 湖を中心としたところで遊牧していた民族であった。『漢書』によると、東は匈奴、西北は康居（ソグド）、西は大宛（フェールガーナ）、南はタリム盆地の城郭都市に接していたとかかれる。そのむかし、塞はこの天山北麓の烏孫の土地にすんでいたという。そこへ匈奴に追われた大月氏がのがれてきて、塞を追いだし、そこを占據した。塞王は縣度をこえて南の方へのがれていったというのである。縣度とは西域南道の皮山

（グマ）から、パミール山中にはいり、インダス川の上流にいたる古代交通路上の險阻な地點である。現在のギルギット Gilgit からダレル Darel の峽谷あたりであろうとおもう。縣度の位置は『漢書』にもわりあいはっきりかかれており、のちの法顯や宋雲らも西北インドにむかう途中通過して、その困難さをかきしるしている。

さて、縣度をこえて塞族はどこへおちついたか。『漢書』西域傳罽賓條に

昔匈奴破大月氏。大月氏西君大夏。而塞王南君罽賓。塞種分散。往往爲數國。自疏勒以西北。休循捐毒之屬。皆故塞種也。

とある。塞王がおちついたという罽賓は、ガンダーラ佛教美術の成立の地として有名なガンダーラ、現在の西パキスタン北部のペシャーワル Peshāwar 盆地である。[11] アフガニスタンから流れてくるカーブル Kābul 川やパミールに源を發するインダス上流やスワット川はここで合流して、インダスの大河となって南流する。縣度からインダス上流づたいにくだってくれば、當然このガンダーラ地方にでてくる。一説には罽賓 Ki-pin は Kophen で、現在のカーブル Kābul に音がちかく、アフガニスタンのカーブルからペシャーワルにかけてのカーブル川流域をさしたものとかんがえる。いずれにせよ、ひろいいみでのガンダーラと解しておいてよいとおもう。

『漢書』の「大月氏西君大夏。而塞王南君罽賓」という記述はたいへん明確であって、大月氏と塞はまったく別の民族移動徑路をとったことをいう。『漢書』によるかぎり、塞族は大夏（バクトリア）の滅亡とは無關係のようである。

ところが、從來の研究では塞＝サカ（Sacae, Scythians）同一説を前提にするので、西方史料にひきづられて、塞もまたバクトリア滅亡に參加したとかんがえる。

E. H. Rapson, *The Scythian and Parthian Invaders*（Cambridge History of India, Vol. I), Cambridge, 1922, W. W. Tarn, *The Greeks in Bactria and India*, Cambridge 1938, A. K. Narain, *The Indo-Greeks*, Oxford 1962, 白鳥庫吉、塞民族考（『東洋學報』一九一七～一九年、『西域史研究』上卷所收）などに、塞＝サカ同一説とその民族移動がいろ

いろこまかく議論されている。大よその結論をいうと、塞種が縣度をこえて南へ移動したという『漢書』の記述はどうしても誤りとせねばならない。『漢書』の編者の不完全な知識によるものであるという。たしかに縣度ごえは、パミール山中のけわしい峡谷や山道で、けっしてふつうの民族移動の道ではない。かりに縣度ごえの移動をみとめるにしても、それはごく一部で、大部分の塞族は西方にむかったのだとする。

さきに引用した『漢書』西域傳烏孫國條をよむと、大月氏は塞をうったあとその住地、つまりイシックル Issik-kul 湖附近にとどまっていた。そのご烏孫が大月氏を攻撃してその地を占め、この契機で大月氏は西走して大夏を征服したという。そうすれば塞族の移動がさきで、しばらくして大月氏の移動がおこったので、バクトリアはまずスキタイ（サカ＝塞）にほろぼされ、さらにもう一度大月氏の攻撃をうけることになる。つまり東西両史料のバクトリア・大夏の征服記事は一つの事件ではなく、連續しておこった二つの歴史事件とかんがえざるをえなくなる。

ではバクトリアを滅亡させたスキタイ人はどうしたか。従來の考え方では、バクトリアにはいったスキタイ（サカ＝塞）は、あらたに侵入した大月氏におわれて、パルチアの北邊にあらわれ、フラーテス二世 Phraates II (ca. 138/7～128 B. C.) およびアルタバヌス二世 Artabanus II (ca. 128～124 B. C.) と交戦する。このパルチア二王はスキタイとの交戦中に没して、つぎのミトラダテス二世 Mithradates II (ca. 123～88/7 B. C.) にいたってようやくスキタイの侵入を撃退し、失なわれた領土を回復できたという (Justin, BK XLII, 1)。

ラプソン Rapson 氏や白鳥庫吉氏らによれば、ミトラダテス二世 Mithradates II によってうちまかされたスキタイ人は、そのまま南下して、現在のシースターン Sistān におちついたという。シースターンはイランとアフガニスタンのちようど國境にあるヘルマンド Helmand 湖の周邊をいう。シースターン Sistān とは Sakastana つまり〈サカ人の土地〉といういみであり、そこにスキタイ（サカ）人が住んでいたことをいみする。スキタイ人の居住は古くて、アケメネス朝時代ころにさかのぼるかもしれない。天山の塞、サカ（スキタイ）はそこで同族といっしょになり、勢力をまして、やが

てヘルマンド川をさかのぼり、カンダハール Kandahār (Arachosia) からガンダーラ Gandhāra へ移動した。一部は南下してシンド地方（インダス下流）やインドにむかったという。そのうちガンダーラにはいったスキタイ（サカ）が、『漢書』の罽賓塞族であるという。

「塞王南君罽賓」という塞族の移動の、はなはだもってまわった解釋である。これは塞＝サカ (Sacae, Scythians) 同一説に立って、バクトリアを滅亡させたサカ Sacae、パルチアと交戰したスキタイ、シースターン (Sakastana) のサカ、罽賓の塞、インダス河口のスキタイ（『エリュトゥラ海案内記』第三十八節）、インド史料におけるシャカ[12]などの斷片をつなげば、上のような塞＝サカの大移動がかんがえだされるのである。

しかし『漢書』の記載は『塞王南越縣度』（烏孫國條）である。はっきりと別の徑路をさししめしているので、上のような歴史家の解釋を許すかどうか問題である。その論説の根據となっている塞＝サカ同一説をもう一度吟味する必要があるようにおもう。

三　『史記』と『漢書』の相違

さきにすこしふれたことであるが、塞の移動は大月氏の移動よりいくらか先立つ。『史記』には大月氏の移動が述べられているが、塞については一言もふれられていない。塞の存在、移動は『漢書』になってはじめてあらわれる。古い事實が新しい記錄にはじめてあらわれるには、なにか事情がなければならない。

そこで、もう一つの塞の史料を紹介しよう。張騫が大夏への遠征から無事中國にかえり、そのごも匈奴征伐に從事して手柄をたて、爵位は博望侯にまでのぼった。しかし、元朔七年 (B. C. 122)、李將軍と出征したさいは、匈奴から逆に包圍され、慘敗を喫したことがあった。爵位は剝奪され、庶人の身分にさげられてしまった。しかし、天子はなにかと張騫に西域の事情をたずねることがあった。『漢書』卷六十一、張騫傳につぎのようにある。

天子數問騫大夏之屬。騫既失侯。因曰。臣居匈奴中聞。烏孫王號昆莫。昆莫父難兜靡。本與大月氏俱在祁連敦煌間小國也。大月氏攻殺難兜靡。奪其地。人民亡走匈奴。子昆莫新生。傅父布就翕侯抱亡。置草中爲求食。還見狼乳之。又烏銜肉翔其旁。以爲神。遂持歸匈奴。單于愛養之。及壯以其父民衆與昆莫。使將兵。數有功。時月氏已爲匈奴所破。西擊塞王。塞王南走遠徙。月氏居其地。昆莫既健。自請單于報父怨。遂西攻破大月氏。大月氏復西走。徙大夏地。昆莫略其衆。因留居。兵稍彊。會單于死。不肯復朝事匈奴。匈奴遣兵擊之。不勝。益以爲神而遠之。今單于新困於漢。而昆莫地空。蠻夷戀故地。又貪漢物。誠以此時厚賂烏孫。招以東居故地。漢遣公主爲夫人。結昆弟。其勢宜聽。則是斷匈奴右臂也。既連烏孫。自其西大夏之屬。皆可招來。而爲外臣。

當時、烏孫はとみに強勢となって匈奴すら手をやくしまつである。この烏孫に贈物をあたえ、公主をおくって同盟すれば、きっと匈奴の西方勢力を斷つことができましようと、張騫は獻策する。張騫がこの獻策をするには、當時無位無官の身であったので、みずからが烏孫の使者にあたり、官界に復歸したい氣持も手傳っていた。

右の文章のなかで、張騫はかつて匈奴にとらえられていたあいだに聞いた烏孫の出自についてかたっている。それによると烏孫はもと大月氏とともに當時の住地（イシックル湖周邊）より東方の、敦煌・祁連（河西方面）にいたというが、大月氏に攻略されて、民族は一度消滅してしまった。そのとき烏孫王昆莫が生まれ、草むらに放置されていたが、狼がきてこれに乳をのませ、烏がきて肉を喰せたという。いわば烏孫の始祖傳說である。そうして烏孫王昆莫が成長し、もとの民衆を率いて大月氏を擊破し、さきの仇をかえしたという。當時、大月氏は匈奴に追われ、イシックル湖附近にのがれ、そこの先住民であった塞を驅逐し、その地に居住していた。いま烏孫にうたれると、ふたたび移動を開始して、ついに西方大夏の地にまで西走した。烏孫は大月氏のあとにうつり住み、匈奴からも獨立して現在の勢力を確保したのである。この張騫の烏孫物語のなかに塞民族の存在がふれられている。

この『漢書』とちようどおなじ張騫のことばが『史記』大宛傳にある。

是後天子數問騫大夏之屬。騫既失侯。因言曰。臣居匈奴中聞。烏孫王號昆莫。昆莫之父。匈奴西邊小國也。匈奴攻殺其父。而昆莫生棄於野。烏嗛肉蜚其上。狼往乳之。單于怪以爲神。而收長之。及壯使將兵。數有功。單于復以其父之民予昆莫。令長守於西城。昆莫收養其民。攻旁小邑。控弦數萬。習攻戰。單于死。昆莫乃率其衆遠徙。中立不肯朝會匈奴。匈奴遣奇兵擊不勝。以爲神而遠之。因羈屬之。不大攻。今單于新困於漢。而故渾邪之地空無人。蠻夷俗貪漢財物。今誠以此時而厚幣賂烏孫。招以益東。居故渾邪之地。與漢結昆弟。其勢宜聽。聽則是斷匈奴右臂也。既連烏孫。自其西大夏之屬。皆可招來而爲外臣。

文章の主旨は、『漢書』張騫傳とほとんどかわらない。しかし分量がへっている。塞種についての記載がない。省略された可能性もあるが、よくよみくらべてみると內容についても相違がある。

まず、烏孫王昆莫の父を攻殺したのが、『史記』では匈奴であり、『漢書』は大月氏である。このわずかなちがいが、そのあとにつづく『史記』と『漢書』の文章の增減にかかわっている。『史記』の文章はたんに『漢書』の文章の省略形ではない。つまり、『史記』では匈奴の單于（老上單于、174～161 B. C.）が死ぬと、それに乘じて昆莫は烏孫の民を率いて遠くに移住し、匈奴の支配を脫して、ますます強勢となったという。ところが『漢書』はここで一つ文章を挿入した。「時月氏已爲匈奴所破。西擊塞王。塞王南走遠徙。月氏居其地。昆莫既健。自請單于報父怨。遂西攻破大月氏。大月氏復西走。徙大夏地。昆莫略其衆。因留居。兵稍彊。會單于死。不肯復朝事匈奴」である。この文章中に問題の塞が登場する。

以下は私の推測であるが、『漢書』の編者班固は、ある事情でむかし烏孫の住地に塞種を王とする國が存在し、それが分散してしまったことをかかねばならなかったらしい。さきに引用した『漢書』烏孫國條の「烏孫國……本塞地也」とかいたのとも關連がある。塞種を登場させ、かつまた分散させるために、大月氏の西方移動の歷史をかりる。大月氏が匈奴に攻擊されて、西方大夏へのがれる途中、天山の塞種に遭遇させるのである。大月氏は塞を攻擊し分散させて、その地を

占據する。大月氏が天山にとどまっては具合がわるいので、こんどは烏孫の力をかりて大月氏を大夏へ驅逐する。それにはもっともらしい理由が必要なので、烏孫王昆莫の父が匈奴ではなくて、大月氏に攻殺されたことにする。そうすれば烏孫は「父怨」をはらすという大義名分がたつ。烏孫の力だけでは不足なので、匈奴の單于に力をかりることにする。こうして烏孫は首尾よく大月氏をうちやぶり、イシックルの土地には烏孫が占住することになった。やぶれた大月氏は遠く大夏の地へのがれ、大夏を征服する。匈奴單于が死ぬと、烏孫は獨立していよいよ強勢となったとし、以下『史記』の文章とほぼかわらなくなる。最後にのべられた烏孫のイシックル方面の移動、すなわち『史記』の「遠徙」に相當するところが、『漢書』では挿入文がはいったため、匈奴單于の死のまえのことになってしまったが、『史記』によると、烏孫の遠徙は（老上）單于の死を契機におこったのであって、死後のことである。

こうしてみると、『史記』と『漢書』には、文章の增減ばかりでなく、內容に相違がある。われわれが史實をもとめるばあい、二者擇一の立場にたたされる。

もともと張騫は〈塞〉についてなにも知らない。塞についての知識は張騫のつたえたものではないらしい。塞の記載とそれにつれて生じた相違は、『漢書』の編者が新しく塞種の知識をえて、机上で『史記』の文章を改作したことによるとおもう。しかも私は『漢書』の塞種が實在の民族ではなくて、假空あるいは傳說上の存在であるとおもう。もし塞のことが正しい歷史事實で、『漢書』の編者がそれをおぎなったとすれば、『史記』と『漢書』の張騫のことばに、これほどの事實の相違があるのはおかしい。『漢書』の塞を歷史事實とすると、東西史料の對比に混亂をまねくことは最初からのべているとおりで、また大月氏の西方移動の年代や烏孫の原住地についても問題が生ずる。

桑原隲藏氏は「張騫の遠征」の論文のなかで、大月氏の移動を二度に區切って、その時期を論證した。大月氏が伊犂方面に移轉した時期を老上單于の攻擊によるとして、單于の在位年中の紀元前一七二～一六一年のあいだとし、つぎに烏孫にうたれて中央アジア（大夏）へうつったのは、張騫が匈奴に拘留されているあいだにおこったできごととして、紀元前一三

九〜一二九年とした。これに對して、藤田豐八氏は烏孫の移住年代について『史記』と『漢書』に相違のあることをのべ、いずれにせよ單于（老上）の死の前後ということで一致するので、烏孫の移住によっておわれた大月氏の大夏への移動は、老上單于の死つまり紀元前一六一年ころとなり、桑原氏のように紀元前一三九〜一二九年になりえないと反駁した。[13] たしかに藤田氏の方が一歩進んだ解釋である。しかし、結果としては『史記』と『漢書』を折中したことになり、結論としては不十分とおもう。『史記』と『漢書』の內容の相違がどうして生じたのかあきらかにするにいたっていないからである。

もう一つは烏孫がイシックル方面に移住するまえの原住地についてである。『漢書』張騫傳には「本與大月氏俱在祁連敦煌間小國也」とあり、『史記』には「匈奴西邊小國也」とだけある。『漢書』の方をとる學者は、烏孫はかって河西地方に居住して、大月氏を驅逐したあとイシックルの地を占めたと理解する。しかしこれも『史記』の內容とは相違し、松田壽男氏らは烏孫の河西地方の居住をはなはだ疑わしいとする。[14] 以上は『史記』と『漢書』の張騫のはなすことばがちがっていることから生じた問題であるが、『漢書』の內容が新しい塞の知識によって『史記』をかきかえたものであることに氣がつかなければ、いつまでも解決しない。一般に古い史實を新しい史料でおぎない訂正するのは、よほどの根據がないかぎり警戒を要する。後世の知識で史實がゆがめられているおそれが多いからである。

四　塞種の傳說性

ではいったい『漢書』の塞の知識はなにによったものであろうか。『漢書』張騫傳の塞字についての顏師古の註に、

塞音先得反。西域國名。卽佛經所謂釋種者。塞釋聲相近。本一姓耳。

とあり、西域の塞族と佛敎の釋族（Śākya）とが同一のものであるとのべる。歷史事實としては一考のねうちもないが、「塞釋聲相近」としているのは興味ぶかい。中インドの Śākya はガンダーラ方言（西北インド・プラークリット）ではよく Sakya と訛り、さらにイラン語風になると Saka となる。同樣に Buddha はガンダーラ Budha となり、Śramana

は Samane となる。佛教ことばの初期の漢譯では、佛陀が浮屠であったり、沙門が桑門とかかれるのは、佛教の初期傳播がガンダーラ（西北インド）やイラン系方言を通してなされたことを示しているようにおもう。同様に Śakya 釋が Saka 塞としてつたわった可能性がでてくる。『漢書』の塞種傳說の正體は、佛教のシャキャ釋族のつたえではないかとおもう。中國佛教傳來についてのもっとも早い確實な記事は、いまのところ『後漢書』卷七二、楚王英傳にかかれたものとされる。永平八年（A. D. 65）ころ、楚王英が黃帝・老子と浮屠（佛陀）をあわせて尙んだという記事である。しかしそれ以前に中國に佛教が傳承された可能性も十分ある。しかしそれほど正確にではなく、『漢書』の編者が西域の一王國の話にかきかえるほどのあいまいな傳承であった。「塞王が縣度をこえて南に侵入し、罽賓を支配した」というのは、塞王傳承の由來した徑路、つまり佛教傳來の道を逆にたどったものではないか。

むすび

以上のように塞を實在の民族ではないと考えてみると、東西の史料はひじょうによく對應する。シル川のかなたからきてギリシア人からバクトリアを奪ったスキタイ人とは、大夏を征服した大月氏のことである。バクトリア（大夏）の滅亡は一度きりである。傳說的な塞を西方史料のスキタイ人とし、大月氏をほかの民族にかんがえようとすると混亂をまねく。東西史料はひじょうに斷片的なものであるが、以上のように考えるとよく一致する。從來、『漢書』の塞は歷史のみならず、ガンダーラや中央アジアの民族、言語學の研究にまで考慮されており、注意、再檢討を要するようにおもう。

たしかに『史記』と『漢書』のちがいは奇妙である。藤田豐八氏や松田壽男氏らはこのちがいを重くみる。[15] 塞にまつわる記事を後人の附加とすれば、大月氏の西徙や烏孫の原住地問題は解きやすくなる。はじめに塞が存在し、匈奴におわれた大月氏が塞と衝突し、それを追いだし、つぎにそこに居すわった大月氏を烏孫が驅逐するという、まるで球撞衝突みたいな民族移動は史實ではなくて、『漢書』の編者がつくりだした假空の民族移動のようにおもう。烏孫の移住には塞も大

月氏も關係がない。大月氏をはばむ塞民族などは存在しなかったのである。老上單于にうたれた大月氏はそのまま天山北縁よりに大宛を通過して、アム川流域に勢力をうつしたのである。もし大月氏が西方史家のいうスキタイ人（サカ Sacae やマサゲタイ Massagetae）であるなら、もともとペルシアやバクトリアの北邊の草原地帶にいたイラン系遊牧民であり、中國の河西方面に出現した大月氏は、そのもっとも東方に進出した勢力であったとおもわれる。

註

① 羽田亨「大月氏及び貴霜に就いて」（史學雜誌四一編九號、『羽田博士史學論文集』上卷所收）參照。

② W. W. Tarn, The Greeks in Bactria and India, Cambridge 2nd ed. 1951, p. 118, note 3.

③ A. Foucher, La vieille route de l'Inde de Bactres à Taxila (Mémoires de la Délégation Archéologique Française en Afghanistan, I) Vol. 1, Paris 1942, pp. 73～112. J. C. Gardin, Céramiques de Bactres (MDAFA, XV), Paris 1957. 水野清一編『ドウルマン・テペとラルマ』（京都大學イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査報告）京都大學一九六八年、三～六頁。

④ D. Schulumberger et P. Bernard, Aï Khanoum (Bulletin de Correspondance Hellenique, LXXXIX) Paris 1965, pp. 590～657. P. Bernard, Chapiteaux Corinthiens Helléniques d'Asie Centrale découverts à Aï Khanoum (Syria, XLV) Paris 1968, pp. 111～151.

⑤ P. Gardner, A Catalogue of Indian Coins in the British Museum. The Greek and Scythic Kings of Bactria and India. London, 1886. W. W. Tarn, op. cit. A. K. Narain, The Indo-Greeks, Oxford, 1962.

⑥ A. D. H. Bivar, The Bactrian Treasure of Qunduz (Journal of the Namismatic Society of India, 1955, pt. 1, pp. 37～52.

⑦ H. L. Jones (trans.), The Geography of Strabo (The Loeb Classical Library), V, pp. 258～261.

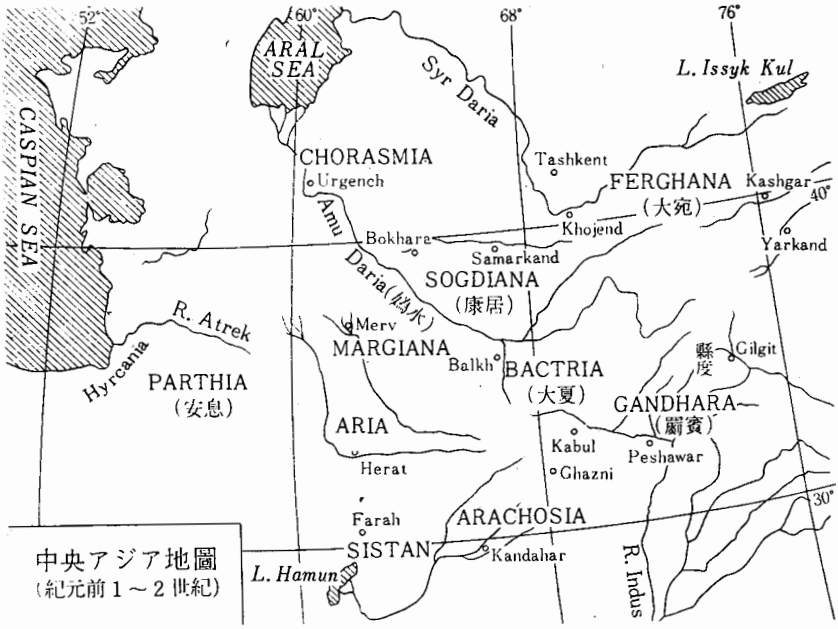
⑧ A. K. Narain, op. cit., p. 129.

⑨ 『史記』大宛傳、大月氏條に「至匈奴老上單于殺月氏王。以其頭爲飲器。」とある。

⑩ 桑原隲藏「張騫の遠征」（『東西交通史論叢』、『桑原隲藏全集』第三卷所收）參照。

⑪ 白鳥庫吉「罽賓國考」（『西域史研究』上卷所收）參照。

⑫ インドにおけるシャカ Śaka あるいはスキタイ史料について、ここではほとんどふれなかったが、パルチアあるいは東イラン系の民族としてかんがえることができ、天山の塞とは無關係であるとおもう。史料としては、E. J. Rapson, A Catalogue



中央アジア地圖
(紀元前1～2世紀)

of Indian Coins in the British Museum. Coins of the Andhra Dynasty, the Western Kṣatrapas, etc. London, 1908. Sten Konow, Kharoṣṭhī Inscriptions (Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol. II, pt. 1), Calcutta, 1929. J. F. Fleet, Inscriptions of the Early Gupta Kings and their successors (Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol. III), Calcutta, 1883. 村川堅太郎譯『ヒリゥトゥラー海案內記』生活社、昭二一年、などにふれられている。

⑬ 藤田豐八「月氏の故地とその西移年代」(『東西交涉史の研究』西域篇所收)

⑭ 松田壽男『古代天山の歷史地理學的研究』烏孫の原住地、二九～三三頁參照。

⑮ 最近目にしたものでは、カニシカュカ王の卽位年にかんするシンポジュームの結果をあつめたA. L. Basham (ed.), Papers on the date of Kaniṣka, Leiden, 1968. のなかで、中國文獻の檢討をうけもつたE. Zürcher氏は、『漢書』張騫の抄譯をこころみ、『史記』の張騫のことばとの相違に疑問をはさんでいる。(E. Zürcher, The Yüeh-Chih and Kaniṣka in the Chinese Sources, p. 366, Note 1.)